

日本で最も長寿、最も多く植林されている

スギ *Cryptomeria japonica* ヒノキ科スギ属

日本で自生する樹木の中では、最も長寿で大木になります。鹿児島県屋久島には樹齢が 2000 年以上の巨木が多数存在します。なかでも「縄文杉」は幹まわり約 16m、樹高約 25m で世界的にみても最大級です。推定樹齢 2000 年～7200 年と様々で数本の個体が合わさった合体木ではないかとも言われています。なお、屋久島では樹齢 1000 年以下のものは小杉と呼ばれています。樹高では高知県大豊町の八坂神社の大杉の高さが約 60m で最も高いとされています。

樹名の由来は諸説ありますが、真っ直ぐ上に伸びる木だから「直木(すくき)」という説が有力です。古来から日本人の暮らしに深く関わり、スギは日本の風景の一部となっています。神社などでは古くから神木として信仰の対象になっており、天然記念物に指定されているものも多いです。酒造りとも関係が深く、麴蓋や仕込みの樽には杉が使われ、新酒が出来上がると杉の葉で直径 40 cm ほどの「杉玉」をつくり、造り酒屋の軒先に飾ってお知らせします。

常緑針葉樹。葉は長さ 1 cm ほどの鎌形で、枝にらせん状につきます。葉の基部は枝を覆うので、枝も緑色に見えます。冬には葉が赤褐色になり、春に緑色に戻るものも多いです。枯れると個々の葉では落葉せず、小枝ごと落ちます。また、日本海側の多雪地帯に自生するスギの葉は閉じていて細く柔らかめの葉を持っていてウラスギと呼ばれ、本州太平洋側や四国、九州の葉は開いていてオモテスギと呼ばれています。ウラスギは雪の重さで枝が折れないように、雪が落ちやすい葉の形状で、枝もしなやかです。また、伏条性があり、垂れ下がって接地した枝から根をおろします。



【縄文杉】

樹皮は赤味を帯びた褐色で、ヒノキより細かく縦に裂けます。花は春、雄花は淡黄色で、前年の枝先に穂状に密生します。雄花はかなり多くつき、花粉は花粉症の原因になっています。開花時の明るい茶色は遠くからでも良く目立ち、花粉は風に乗って遠くまで飛んでいきます。雌花は球形で前年の枝先に 1 個ずつ下向きにつきます。球果はその年の秋に熟します。

スギは成長が早く、加工しやすい優良材で、縄文時代から使われています。用途は、建築材、家具、器具、樽、桶、指物、曲物、舟など様々です。森林ふれあい学習館は県産材で建てられており、玄関ホールには岩手の木として大木が設置されており、裏側に回ると材が分かります。また、枝葉は線香や精油などに利用されています。スギは「木の文化」が根付く日本にとって最も多く植林され、利用されている重要な木材です。



【雄花】



【若い球果】